



公開と発信を

この人と30分

ぶらり訪問③



訪問インタビュー第三回は、「住宅屋」を自認する研究者に「ユーザーの支持に応える」を仮テーマに木材と建築にかかわる様々なお話を伺いました。

一緒に改正努力を

Q・品確法施行以降、木材業界は窮地にありますが、住宅新法、改正法へのお考えは？
基準法の改正、品確法の施行は、阪神・淡路大震災の悲惨な被害と一部不心得な業者による欠陥住宅の社会問題化が端緒でした。しかし、木造に関わる研究者として被災現場を調査すると耐震技術上は特に驚くべきことはなく、基本技術が誠に無防備なものが必然的に倒壊しているわけです。

住宅市場を充実させるためには必要な立法化だったのではないのでしょうか。
これはあくまでマンションや戸建て住宅の分譲系に比べると、注文系住宅となるとちよつと趣は違ってきますね。今回示された尺度の正否はともかく大会社がつぶれる時代にあつて、エンドユーザー保護の視点から品質保証という共通のモノサシができました。しかし一旦決まった法律が変えられないわけではありませんから、業界と関連の研究者が一緒になつて不合理であれば改正努力をすべきでしょう。

ポイントが違つ

Q・木材の利用技術についてお考えをお聞かせください。
加工技術面では、継手・仕口に機械プレカットが導入されたことでしょうか。これは林野庁等の行政的な支援もあつて、木材業界でも「合理化」の名のもとにプレカット加工業への進出が増加し、既に全国で約一千万が稼動しています。単に手加工を機械加工に置き換えた

だけで、その本質は技術開発とは言えません。
今日大騒ぎしている「乾燥」問題も、A/Q認証制度が動き出した昭和五十年代後半の段階において、プレカット工場段階では整理すべき事柄でした。乾燥木材を条件に機械加工の精度を売り物にするのが第一段階の目標だったはずですから、スタートの段階で素材としての取り扱い方を間違えていたわけです。

ユニクロだけじゃない

Q・新築住宅着工減のなかで、木材業界はなにを？
景気停滞の中、二八〇円の牛井やユニクロに象徴されるような低価格商法が話題となっています。現に住宅メーカー大手の中からも坪二五万円の住宅を期間限定で販売する会社も登場しました。評論家は「安い」ことのみを目を向けてわつと取り上げますが、大事なものはそれを実現可能にした合理性、工夫、パッケージ化できる色々な手法など

工法の開発については、大同小異といったところで、視野が狭いような気がします。私自身独自の木造工法を開発し、一部の地域ビルダーに活用願っています。大壁はつまらないとの意見もありますが、筋交い主体と面材耐力壁の構成では変形量も違うので、通し柱に添え柱を加えて接合部の合理化を図り、構造用面材を用いた大壁で基本的な構造性能を担保しています。従つて、いわゆる継手・仕口がなく、接合金物も使わない工法になっています。

まず、情報の

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物材料科学専攻 助教授 安藤直人 氏

プロフィール

1950年東京生まれ。農学博士。幼い頃から建築現場が好きで、趣味が職業に。東京大学修士課程修了後、住宅会社研究所等様々な遍歴を経て、97年から現職。専門外では「旅の途中で読む推理小説が心地よい」とは氏の言。「テロリストのパラソル」藤原伊織、「ホワイトアウト」真保裕一など同世代から若手作家を乱読。座右の銘「上は使え、下は育てろ」。血液型A。

があるということですが。そのトータルが二五万円となつたわけ、住宅のユニクロとは思いません。中小企業者はまず地域をちゃんと見ることが必要です。そもそも全国ベースで事業展開する大手と地域業者では立脚点が違うはず。躍進中のユニクロも中国での生産を基盤に、価格破壊という手法を取つたに過ぎません。これが全てかといえは、片方ではルイヴィトン、プラダ等高級品が売れています。今後住宅に関して言えることは、価格構成の「情報公開」が迫られることです。「木材は高いか、安い」はつきり言つて安いです。しかし、木材業界のパートナーであるべき方々が情報公開をしていないことに、エンドユーザーが疑問の声を出し始めています。世の中、損を前提に売る人はいませんから、「この材料だつたらこういう家が出来る」「この材料だつたらいくら」と木材業界側から情報を公開すべきでしょう。木材だつてユニクロもルイヴィトンもある、それではないのでしょうか。

「すて木」を創る

Q・地域で木材関連業界が連携して住宅を供給するために何を？
これまでの地域住宅に足りないのは、木が「きれいに見える」デザイン性がないことです。構造材も、仕上げ材も量売りのものはわかりませんが、住空間のなかで「木」ってやっぱりいいな、素敵だなと思えるデザインを心懸けることですね。全国に多くの木造公共施設ができましたが、「またここに来たいね」と思われるような「すて木」を創らなくちゃいけません。

自信の裏付けは技術

Q・木材利用の新たな視点という観点から、静岡の次代を背負う木材人に向けひとことお願いします。
有り難いことに新素材と違い、築千年の社寺建築の事例を持ち出さなくとも、木材の素晴らしさは歴史が証明しています。とにかく「自信を持って」と。自信の裏付けは「技術」、それもこれからの利用技術。今までの素材を越えた部分でのシステムとして

戦後の復興期から二十世紀までは軽量鉄骨のプレハブも良かったかも知れませんが、安定した社会をめざす今世紀は「木の家」が十分にキーワードになり得ます。ギャップがあるとは言え、マーケットは現実に支持しているわけで、それに対しきちつと情報発信していかないだけです。文化的、伝統的な面ばかりを強調するのではなく、また技能ではなく技術、現代のテクノロジーを産学共同して進めるべきです。今からでも遅くない、やらなきゃダメです。

の技術。これは工法や経済的なシステムにつながつてゆきます。国産材を例にとれば、壊れたのは経済システム、一方で海外からくる木材の商流システムが出来上がった。今、見直さなければならぬのは将来に向け日本の経済システムと住宅生産のシステムの中で、自分たちの位置付けを見つけて出すことです。これは決して、先代、先々代がやってきた同一路線上にはないのですから、そこをしっかりと自覚してください。これからはまさに「創造」です。
木材という有難い材料を使つて会社をどう将来に向けるか、今日の目は確かに厳しい。しかし、木材の価値、新しい価値創造につながるような技術開発を進め、人のネットワークも変えてゆく時代ですから、もう一度きちつと情報発信して、木の位置付けを自分たちが意識することが何よりも大切なことです。木材業界には地域のことを考える人が必要です。利益誘導する人ではなく、「夢」がちゃんと語れる人です。期待しています。
(文責 編集室)